

C. M. Doke によるランバ語の参照文法

テンス・アスペクト分析にみられる問題点

牧野友香

Reference Grammar of Lamba by C. M. Doke Focusing on His Analysis on Tense and Aspect System

MAKINO, Yuka

Keywords: reference grammar, Bantu languages, Lamba, tense and aspect

キーワード: 参照文法, バントゥ諸語, ランバ語, テンス・アスペクト

1. はじめに
2. Doke による 2 つの文法書の構成とそれぞれの特徴
3. Doke によるランバ語のテンス・アスペクト解釈の問題点
4. 新たなテンス・アスペクト体系の提案
5. おわりに

1. はじめに¹

ランバ語はニジェール・コンゴ語族バントゥ諸語に属する言語である。以下の分布図の 23 番で示されている地域が、ザンビアにおいてランバ語が話されている地域である。ザンビア中央部のほかコンゴ民主共和国のアウトカタンガ州でも話される。話者数は 198,000 人である (Eberhard et al. 2019)。

牧野友香. 2022. 「C. M. Doke によるランバ語の参照文法：テンス・アスペクト分析にみられる問題点」. 渡辺己・澤田英夫 (編) 『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 227-246. DOI: <https://doi.org/10.15026/116968>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 本研究は平成 29 年度日本学術振興会特別研究員奨励費「ベンバ語およびその周辺言語におけるテンス・アスペクト体系における比較研究」(JP17J00068) の成果の一部である。

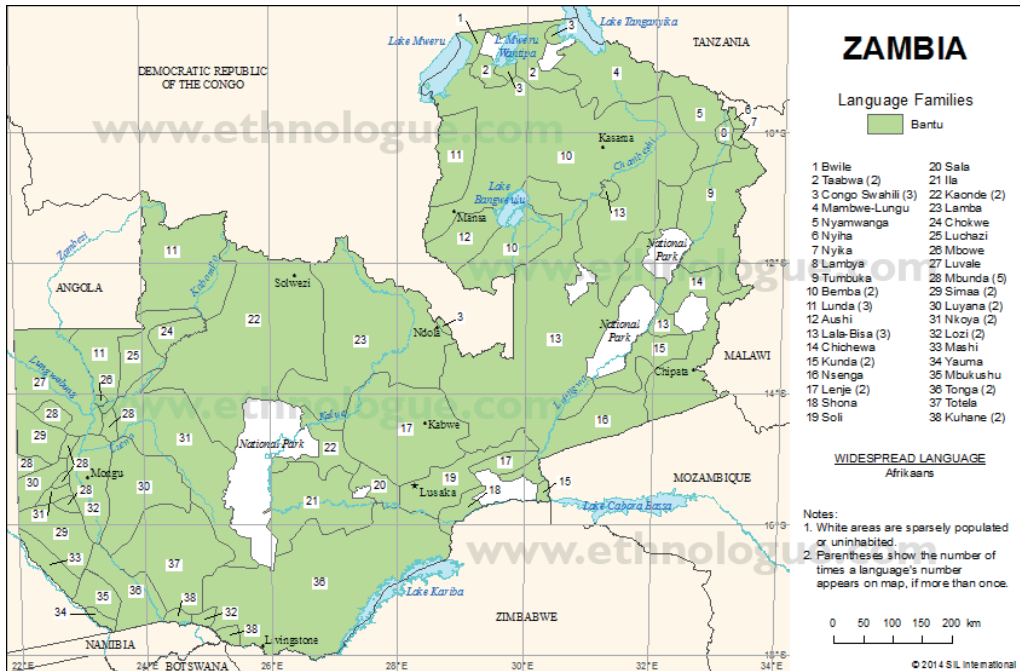


図1 ザンビアの言語分布図 (Eberhard et al. 2019)

ランバ語には、Clement Martyn Doke によって翻訳された聖書 (Doke 1959) がある。Doke は植民地時代の宣教師であり、言語学者でもある。ズールー語や南ソト語など、南部アフリカのバントゥ諸語の辞書や文法書などを数多く残している² (Doke 1927a, Doke 1954, Doke & Mofokeng 1957 など)。当時は聖書の翻訳が一大プロジェクトであり、文法書は聖書翻訳のために書かれていた時代であった。Doke は、ランバ語については以下の2つの文法書を残している。

1922. *The Grammar of the Lamba Language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.

1938. *Textbook of Lamba Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.

上記の2つが書かれるより少し前に、Arthur Cornwallis Madan によっても文法書が書かれている。Madan (1908) は、ララ語とランバ語はかなり類似していると断りを入れたうえで、ララ語の文法のみを記述している (Madan 1908: A2)。巻末に付いている語彙集はララ語のもののみであるが、民話³はララ語、ランバ語、ビサ語の3言語のものが集録されている。

1908. *Lala-lamba Handbook: A short Introduction to the South-Western Division of the Wisa-Lala Dialect of Northern Rhodesia, with Stories and Vocabulary*. Oxford: the Clarendon Press (Reprinted by Nabu Press in 2013).

² Doke は言語についてだけでなく、ランバの人々の慣習や信仰を記録した *The Lambas of Northern Rhodesia: A Study of their Customs and Beliefs* (1931年 Negro University Press 出版) も残しており、これにも簡単な文法スケッチがついている。

³ 民話や諺については Doke も収集を行っており、例えば Doke (1930, 1934, 1939) がある。

ランバ語の辞書については、Doke が編纂した British Museum Press 出版の 1957 ページからなる *Lamba-English Dictionary* があるが、入手困難のようである。現時点で手に入るのは 179 ページからなる語彙集 (Doke 1963) のみである。Madan (1913) による、ランバ語、ララ語、ビサ語の 3 言語と一緒に収録されている辞書もある。これは Nabu Press によって再出版されたものが入手可能である。

Doke, Clement, M.

出版年不明. *Lamba-English Dictionary*. London: British Museum Library.

1963. *English-Lamba Vocabulary*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.

Madan, Arthur, C.

1913. *Lala-Lamba-Wisa & English: English & Lala-Lamba-Wisa Dictionary*. Oxford: the Clarendon Press (Reprinted by Nabu Press in 2011).

文法書や語彙集のほかには、音声の分析をした Doke (1927b) や、近年出てきた動詞の声調の研究に Bickmore (1995)、湯川 (1995) がある。

本稿では、Doke (1922) と Doke (1938) をそれぞれ紹介した後に、テンス・アスペクト (以下 TA) 体系に焦点を当てた節を設けている。筆者が現地調査で得たデータ⁴をもとに、Doke による TA 体系の解釈の一部を訂正し、ランバ語の新しい TA 体系の提案を行う。

2. Doke による 2 つの文法書の構成とそれぞれの特徴

表 1 は、1922 年出版の *The Grammar of the Lamba Language* と 1938 年出版の *Textbook of Lamba Grammar* それぞれの章立てを並べたものである。それぞれの章に割かれているページ数も示してある。最初に音声、音韻についての説明があり、品詞分類に入る前にランバ語の構造について概略が入る。品詞それぞれについての章が続いた後、借用語、統語の章と続くが、Doke (1938) は借用語の章に入る前に改めて語の構造についてのまとめの章が入る。

Doke (1938) のほうが総じてボリュームがあるが、索引があるため参照が可能である。ただし、以下に挙げるように Doke (1938) は章につけられている名前が独特で、名前から内容を予想するのが難しい場合がある。例えば XVIII 章の Foreign Acquisition は、「第二言語獲得」と訳しそうになるが、これは借用語について書かれた章である。Doke (1922) では XV 章 Lamba Borrowings がこれに当たる。Doke (1922) のほうが、目次から探したい文法項目がどこに書かれているのかという見当はつけやすいかもしれない。

Doke (1938) で独特な名前が付けられている章はほかにもある。例えば XX 章以降の The Syntax of で始まる章では、XX 章は The Syntax of Substantive, XXI 章は The Syntax of Qualificative, XXII 章は The Syntax of Predicate, XXIII 章は The Syntax of Descriptive となっている。以下各章について簡単に説明するが、XXI 章以外は章の名前から想像しにくい内容となっている。

⁴ 本稿で提示しているデータは、特に明記しない限り、平成 29 年度特別研究員奨励費「ベンバ語およびその周辺言語におけるテンス・アスペクト体系における比較研究」(JP17500068) の助成を受けて筆者が現地で行った調査によって収集したものである。ザンビア中部のコッパーベルト州の州都ンドラの中心部からほど近い場所にて、当時 60 代の女性 E.M 氏を調査協力者としてデータ収集を行った。E.M 氏は、初等教育から高等教育まで教育を修めており、ケニアへの留学経験もある。ランバ語のほか、地域共通語であるベンバ語と英語を話す。

表1 Doke (1922) と Doke (1938) の章立て比較

Doke (1922) <i>The Grammar of the Lamba Language</i>			Doke (1938) <i>Textbook of Lamba Grammar</i>		
Introduction		1p	Introduction		3p
I	Phonology	13p	I	The Phonetic Structure of the Lamba Language	41p
II	Euphonic Concord	2p	II	The Structure of the Lamba Language	7p
III	The Noun	18p	III	The Noun	47p
			IV	The Noun (continued)	18p
IV	Adjective and Concord	7p	V	The Pronoun	26p
V	Pronoun and Demonstratives	20p	VI	The Adjective	7p
			VII	The Relative	3p
			VIII	The Numeral	6p
			IX	The Possessive	12p
VI	The Verb	24p	X	The Verb – Derivation	72p
VII	The Monosyllabic Verbs	3p	XI	The Verb – Conjugation	67p
VIII	Verb Auxiliaries	12p	XII	The Copulative	24p
IX	Derivative Verbs	18p			
X	The Perfect Stem	5p	XIII	The Adverb	20p
XI	The Adverb	4p	XIV	The Ideophone	16p
XII	Onomatopœia	4p	XV	The Conjugation	9p
XIII	Interjections	1p	XVI	The Interjection	6p
XIV	Prepositions and Conjugations	2p	XVII	The Classification of Formatives	18p
			XVIII	Foreign Acquisitions	4p
XV	Lamba Borrowings	2p	XIX	The Lamba Sentence	7p
XVI	Syntax	21p	XX	The Syntax of Substantive	16p
総ページ数		157p	XXI	The Syntax of Qualificative	16p
			XXII	The Syntax of Predicate	15p
			XXIII	The Syntax of Descriptive	12p
			XXIV	Idiom	7p
			Index		8p
			総ページ数		487p

まず XX 章 The Syntax of Substantive である。この章では文の意味役割の分析や、主語や目的語が複数ある場合のコンコード、補文や埋め込み文についての説明がなされている。次の XXI 章 The Syntax of Qualificative では、修飾要素が複数並ぶ場合についての説明がなされている。続く XXII 章 The Syntax of Predicate では、接続詞によって導かれる複文などについて説明がなされている。XXIII 章の The Syntax of Descriptive では、場所や時間、理由、譲歩、条件、目的などがランバ語ではどのように表現されるかが述べられている。構造というより意味の側面からの説明がなさ

れた章だと言える。動詞の意味分類についてもここで触れられている。qualificative 「修飾する, 限定する」や substantive 「名詞, 名詞的なもの」は別として, predicate 「述語, 述部」, descriptive 「記述的な, 描写的な」という単語では抽象的過ぎて, 上記のような内容が書かれているとは想像しにくい。

Doke (1922) と Doke (1938) とでは, 書かれた目的も異なっている。ズルー語の文法書 (Doke 1927) が教育において成果を収めたことから, Doke (1938) はこれにならった構成が組まれている (Doke 1938: vii)。例えば上述の XXIII 章の The Syntax of Predicate が場所や理由, 譲歩や条件などがどのようにランバ語で表されているかという観点で説明されているのは, 学習者の視点に立った説明を試みた故かもしれない。Doke (1938) は序文において, Doke (1922) には多大な誤解がありバントゥ諸語本来の姿をとらえることができなかったと述べている (Doke 1938: iv)。しかしながら Doke (1938) も, 言語の記述というよりは学習書としての側面が強く, バントゥ諸語の本来の姿を記述し損ねていると言えるかもしれない。

Doke (1922) と Doke (1938) とでは表記法も異なっている。まず長母音の表記である。Doke (1922) では長母音に関しては母音の長短の区別について説明している節 (Doke 1922: 14) でしか表記の区別がなされていなかったのが, Doke (1938) では長母音に $\bar{\quad}$ (マクロン) が表示されることにより, 長短の区別が文法書全体を通して区別されるようになった (cf. (1))

次に動詞の表記である。(1) は Doke (1922) と Doke (1938) に共通して見られた「その草は枯れるだろう」という意味の文である。(1a) には Doke (1922) の表記を, (1b) には Doke (1938) の表記をそれぞれ原文のまま斜体で示している。(1c) は筆者による形態素分析である。Doke (1922) では, (1a) で示しているように動詞が 8 クラス主語接辞の *fī*, 遠い未来の出来事を表す TA 接辞 *ka-*, 動詞語幹 *fwa* 「死ぬ」とそれぞれ分かち書きされているのに対して, (1b) の Doke (1938) ではこれらの要素がつなげて書かれている⁵。

- (1) a. *ifyani* *fī ká fwa* (Doke 1922: 66)
 b. *ifyāni* *fīkafwa* (Doke 1938: 267)
 c. *i-fi-ani* *fi-ka-fu-a*
 AV-8NP-grass 8SM-REM.FUT-die-BF⁶
 「その草は枯れるだろう (The grass will die)」

Doke (1938) は, (1a) のような分かち書きの表記よりも (1b) のようにつなげて書く表記のほうが

⁵ ランバ語にはほかのバントゥ諸語と同様に「名詞クラス」と呼ばれる名詞の分類があり, 名詞は 18 種類のグループに分けられる。主語接辞, 目的語接辞, 名詞修飾語は, それぞれ名詞クラスに呼応した形で現れる。例文のグロスで名詞の前に示している数字は, その名詞が属する名詞クラスを表し, 名詞以外についている数字は呼応している名詞が属する名詞クラスを表す。主語接辞と目的語接辞は人称 (単数は sg, 複数には pl) またはクラス番号で表す。Doke (1922) や Doke (1938) で付けられているグロスは, 以下のようにほぼ英訳に近い。形態素分析はなされていないが, 呼応関係は下線で示されている。このようなグロスは全編通してではなく, ランバ語の構造について説明している章や文の要素について考察している章でしか付けられていない。

(i) *Nāwona utuni tunini tusanu.*
 I-saw small-birds them-little them-five
 "I saw five small birds." (Doke 1938: 42)

この節では Doke (1922, 1938) の解釈を中心に述べているが, 各 TA 形式についての説明は, 牧野 (2019) と重なる部分が多い。詳しくは牧野 (2019) を参照されたい。

⁶ AV は Augment Vowel の略, NP は Noun Prefix の略である。そのほかの記号・略号については略語一覧を参照のこと。

広く受け入れられていると考え、分ち書きを改めたと述べている (Doke 1938: vi)。動詞を接辞ごとに分ち書きする書記法は、南部のバントゥ諸語などでは一部見られるが (cf. ヘレロ語, ツワナ語), あくまで *fikafwa* はこれでひとつの動詞であり, つなげて書くほうが言語の実態を正確に表している (cf. 米田 2012: 49-50)。

3. Doke によるランバ語のテンス・アスペクト解釈の問題点

これ以降の節では, ランバ語の TA 体系に焦点を当てる。まず Doke (1922, 1938) による独特の用語法について代案を提示する。Doke (1922, 1938) からかなりの時間が経過していることも考慮して, 各 TA 形式が現存しているかどうか, 新たな形式がないかの確認も行う。

まず, ランバ語の動詞構造は以下の通りである。() 内の要素は任意であるが, それ以外の要素は必須である。

(前主語接辞-)主語接辞-TA 接辞-(目的語接辞-)動詞語根(-派生接辞)-語尾

以下の表 2, 表 3 にはそれぞれ Doke (1922, 1938) による TA のパラダイムを示している (Doke 1922: 71, Doke 1938: 273, 297)。SM は主語接辞 (subject marker) の略, VR は動詞語根 (verb root) の略である。TA に関わる要素は太字で示している。各形式には番号を割り振っている。Doke (1922) の表 2 には 28 形式, Doke (1938) の表 3 には 30 形式ある。

表2 Doke (1922: 71) の TA パラダイム⁷

		Simple	Continuous (<i>-li+uku-</i>)	Progressive (<i>chi-</i>)	Perfect
Past	Remote		①SM- a-li uku-VR-a		③SM- a-li-VR-ile
	Immediate	④SM- a-VR-a	②(SM- a-li) uku-VR-ile)		⑤SM- a-li SM- a-VR-a
	Historic	⑥ ka-SM-VR-a ⑦ ka-SM-VR-ile	⑧ ka-SM-li uku-VR-a ⑨(ka-SM-li uku-VR-ile)	⑩ ka-SM-chi-VR-a ⑪(ka-SM-chi-VR-ile)	
Present			⑫SM- li uku-VR-a ⑬SM- li uku-VR-ile	⑭SM- chi-VR-a ⑮SM- chi-VR-ile	⑯SM- li-VR-ile
Future	Immediate	⑰SM- aku-VR-a	⑱SM- aku-li uku-VR-a ⑲SM- aku-li uku-VR-ile	⑳SM- aku-li uku-chi-VR-a ㉑(SM- aku-li) uku-chi-VR-ile)	
	Remote	㉒SM- ka-VR-a	㉓SM- ka-li uku-VR-a ㉔(SM- ka-li) uku-VR-ile)	㉕SM- ka-li uku-chi-VR-a ㉖(SM- ka-li) uku-chi-VR-ile)	
Habitual		㉗SM- la-VR-a			

⁷ Doke (1922) ではモダリティを表すと考えられる接辞 *nga-* が用いられた形式を挙げているが, ここでは省いている。

表3 Doke (1938: 273) の TA パラダイム

		Simple			Progressive (<i>chi-</i>)	
		Indefinite	Continuous (-li uku-, -a)	Perfect (-li uku-, -ile)	Continuous (-a)	Perfect (-ile)
Past	Remote	③SM-a-li-VR-ile	①SM-a-li uku-VR-a	③SM-a-li-VR-ile		
	Immediate	④SM-a-VR-a		②SM-a-li uku-VR-ile		
	Historic		⑧ka-SM-li uku-VR-a	⑦ka-SM-VR-ile ⑨ka-SM-li uku-VR-ile	⑩ka-SM-chi- VR-a	⑪ka-SM-chi- VR-ile
Present			⑫SM-li uku-VR-a	⑬SM-li uku-VR-ile	⑭SM-chi-VR-a	⑮SM-chi- VR-ile
Habitual		⑰SM-la-VR-a				
Future	Immediate	⑰SM-aku-VR-a	⑱SM-aku-li uku-VR-a	⑲SM-aku-li uku-VR-ile	⑳SM-aku-li uku-chi-VR-a	㉑SM-aku-li uku-chi-VR-ile
	Remote	㉒SM-ka-VR-a	㉓SM-ka-li uku-VR-a	㉔SM-ka-li uku-VR-ile	㉕SM-ka-li uku-chi-VR-a	㉖SM-ka-li uku-chi-VR-ile

縦に並べているのがテンスである。ランバ語のテンスは、過去も未来もそれぞれ時間区分が複数に分かれる。このような現象は、バントゥ諸語において特に顕著であるとされている (Dahl 1985: 121)。問題となるのは、まず過去と未来の時間区分の境界線がどこにあるのか、過去テンスの中に並べられている Historic が何を指しているのかという点である。横に並べているのはアスペクトであり、Simple, Indefinite, Continuous, Progressive, Perfect がある。しかし並び方からみてわかるように Doke (1922) の表 2 と Doke (1938) の表 3 とではこれらアスペクトの扱いが異なっている。

§2 で指摘した Doke (1922, 1938) の独特な用語の使い方は、ランバ語の TA 体系をみるうえでも問題となる。例えば 'Perfect' は、Doke (1922) と Doke (1938) とでは指しているものが異なる。Doke (1922, 1938) は接辞 *chi-* によって表される形式を Progressive と呼んでいる。Progressive とは、現代の用語法に照らし合わせると「発話時 (あるいは参照点) において続いている動作を表す」(Comrie 1977: 32-40, cf. Dahl 1985: 90-95, Bybee et al. 1994: 126) ものである。しかしながら、後述するように Progressive という用語では接辞 *chi-* の機能を十分に表しきれていない。ランバ語のテンス・アスペクト体系を再記述するにあたり Doke の用語法をそのまま用いてしまうと、多大な誤解が生じかねない。再記述のためには、現代の用語法と参照ができるようにする必要がある。

このように Doke (1922) と Doke (1938) の不一致、用語の使い方の問題があるが、時間の経過によって出てきた問題もある。Doke (1922, 1938) では報告されていたが現存していない形式や、Doke (1922, 1938) では報告されていなかった新しい形式がある。

以下、これらの問題について詳しくみていく。なおこれ以降、動詞の各形式については、表 2 および表 3 に付した数字によって示す。

3.1. 時間区分

ここでは, Doke (1922, 1938) では明示されていなかったランバ語の時間区分の特定, および現在テンスの捉え方について考察を行う。

3.1.1. 未来

まず未来テンスの時間区分の境界線からみる。以下の (2) は, TA 接辞 *ka-* と語尾 *-a* によって表される形式②の例である。Doke (1922) では Remote Future の Simple, Doke (1938) では Remote Future Indefinite とされている。この形式は, 発話当日の翌日以降に起こる出来事を表す。そのため (2a) や (2b) のように *mailo* 「明日」, *uyu úmwaka* 「来年」とは共起するが, (2c) のように *leelo* 「今日」とは共起しない。

- (2) a. *ichiβusa chanji chi-ka-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-read-BF 5.this 5.book tomorrow
 「私の友達は明日この本を読むだろう」
- b. *ichiβusa chanji chi-ka-pend-a ili ibuuku uyu úmwaka*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-read-BF 5.this 5.book 3.this 3.year
 「私の友達は来年この本を読むだろう」
- c. **ichiβusa chanji chi-ka-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-read-BF 5.this 5.book today
 (int. 私の友達は今日この本を読むだろう)

一方 Immediate Future の Simple あるいは Indefinite とされている TA 接辞 *aku-*, 語尾 *-a* によって表される形式⑦は, これから起こる出来事の中でも, 発話当日に起こるものを表す。(3a) のように *leelo* 「今日」とは共起するが, (3b) のように *mailo* 「明日」とは共起しない。

- (3) a. *ichiβusa chanji chi-aku-pend-a ili ibuuku leelo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-read-BF 5.this 5.book today afternoon
 「私の友達は今日の午後この本を読むだろう」
- b. **ichiβusa chanji chi-aku-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-read-BF 5.this 5.book tomorrow
 (int. 私の友達は今日の午後この本を読むだろう)

このように, ランバ語の未来テンスは形式②によって明日以降の未来の出来事が表され, 形式⑦によって発話当日のこれから起こる出来事が表される。つまり, ランバ語の未来の時間区分は今日 (Hodiernal) と明日以降 (Post-Hodiernal) に二分されるということである。

3.1.2. 過去

次に, 過去テンスの時間区分である。TA 接辞 *a-* と *li-*, 語尾 *-ile* の組み合わせによって表される形式③は, Doke (1922) では Remote Past Perfect, Doke (1938) では Remote Past Indefinite あるいは Remote Past Perfect とされている。この形式は, 発話当日の前日以前に起こった出来事を表す。

(4a) のように *mailo* 「昨日」⁸ とは共起可能であるが、(4b) のように *leelo* 「今日」とは共起不可能である。

- (4) a. *ichíbusa chanji chi-a-li-pend-ile ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-ANT-read-ANTF 5.this 5.book yesterday
 「私の友達は昨日この本を読んだ」
- b. **ichíbusa chanji chi-a-li-pend-ile ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-ANT-read-ANTF 5.this 5.book today
 (int. 私の友達は今日この本を読んだ)

以下の(5)は、Doke (1922) では Immediate Past Perfect, Doke (1938) では表3にはないが Compound Immediate Past とされている形式⑤である。コピュラ動詞の過去形のうしろに、TA 接辞 *a-* と語尾 *-a* が付加した形式④(形式④については後述)が続くことによって表される。この形式は、発話当日に起こった出来事を表す。(5a) のように *leelo* 「今日」とは共起するが、(5b) のように *mailo* 「昨日」とは共起しない。

- (5) a. *ichíbusa chanji chi-a-li chi-a-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PST-read-BF 5.this 5.book today
 「私の友達は今日この本を読んだ」
- b. **ichíbusa chanji chi-a-li chi-a-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PST-read-BF 5.this 5.book yesterday
 (int. 私の友達は昨日この本を読んだ)

(4) で *mailo* 「昨日」と共起した形式③は、以下の(6a) のように昨日よりもはるか前の過去の出来事も表すことができる。Doke (1922, 1938) にある前主語接辞 *ka-* と基本語尾 *-a* によって表される、Historic Past とされている形式⑥は、(6b) に示すようにこの文脈には適さない。(7) のように、従属節の形式③によって遠い過去の出来事であることが示されていなければ前主語接辞 *ka-* の形式は使われない。さらに、(7) をみると発話の前日の出来事を表すのに対しても前主語接辞 *ka-* が使われているため、はるか昔の出来事を想定させる Historic という呼び方では誤解を招く。

- (6) a. *ichíbusa chanji chi-a-li-pend-ile ínkalata shine uyu úmwaka*
 7.friend 7.my 7SM-PST-ANT-read-ANTF 10.letters 10.four 3.this 3.year
 「私の友達は去年手紙を4通読んでいる」
- b. **ichíbusa chanji ka-chi-pend-a ínkalata shi-ne uyu úmwaka*
 7.friend 7.my NAR-7SM-read-BF 10.letter 4.four 3.this 3.year
 (int. 私の友達は去年手紙を4通読んでいる)
- (7) *ichíbusa chanji ka-chi-pend-a ili ibuuku ulu chi-a-lek-ile uku-lishi-a*
 7.friend 7.my NAR-7SM-read-BF 5.this 5.book when 7SM-PST-stop-ANTF INF-play-BF

⁸ *mailo* は発話当日の「±1日」を表すことのできる直示表現である。*mailo* が過去を表す述部に現れる場合においては「昨日」を、未来を表す述部に現れる場合には「明日」を表す。

ingoma mailo

10.drums yesterday

「私の友達は昨日太鼓を叩き終わってからこの本を読んだ」

つまり、前主語接辞 *ka-* によって表される Historic と呼ばれていた形式は、昨日よりも遠い過去の時間を区分しているというわけではない。前の文によって過去のどの時点にあるのかが明示されていないと使うことができない、依存テンスである。

このように、ランバ語では発話当日に起こった出来事が複合形式⁹⑤によって表され、発話当日より前日に起こった出来事はその遠さに関わらず形式③で表される。つまり、ランバ語の過去テンスは発話当日 (Hodiernal) と昨日以前 (Pre-Hodiernal) の二区分のみであり、Historic Past の形式はこの時間区分とは無関係である。

3.1.3. 現在

Doke (1922, 1938) が Habitual と呼んでいる TA 接辞 *la-* と語尾 *-a* から成る形式⑦は、以下の (8) のように習慣的な出来事を表す。

(8) *ichiβusa chanji chi-la-pend-a Chinese inshiku shonse*

7.friend 7.my 7SM-PFV-read-BF Chinese 10.day 10.all

「私の友達は毎日中国語を読む」

Doke (1922, 1938) の表 2, 3 をみると、Habitual は Past, Present, Future と並列して縦に並べられており、Present と Habitual をそれぞれ別に扱っていることがわかる。確かに (8) の *la-* は習慣を表している。しかしながら、*la-* は以下の (9) のような意味も表す。(9) は、「書く」という行為の始まりや終わりを取り立てて述べているわけではなく、ただひとまとまりの出来事を述べている。これは Perfective (完結相) (Comrie 1977: 17–18) の特徴である。

(9) *a-la-lemb-a inkalata*

3sgSM-PFV-write-BF 10.letter

「その人は手紙を書く」

バントゥ諸語には、Habitual と Perfective を形式によって区別する言語が多い。例えば TA 接辞 \emptyset 、基本語尾 *-a* から成る形式によって Perfective が表され、これに接尾辞 *-ang* が付け足されることによって Habitual が表されるブクス語のようなケースである (Nurse 2008: 135–136)。しかしながらランバ語には、TA 接辞 \emptyset と基本語尾 *-a* からなる形式は存在せず¹⁰、ブクス語の接尾辞 *-ang* に相当する接辞も存在しない。ランバ語では、Perfective と Habitual を区別する他の形式もないため、両者は (8), (9) のように同じ形式によって表されることになる。さらに形式⑦は、(8), (9) にみるように長い時間 (期間) におよぶ出来事を表しており、その中には発話時が含まれている (cf. Comrie 1985: 37–38)。検討の余地はあるかもしれないが、今のところ形式⑦を現在テンスの Perfective として扱うのが最も適切であると考えられる。

⁹ 複数の動詞が組み合わさることによって TA を表す形式を本稿では複合形式と読んでいる。

¹⁰ 否定や従属節では TA 接辞 \emptyset と基本語尾 *-a* からなる形式が現れるが、TA 接辞 *la-* が否定や従属節では現れることができない。いずれにせよ Perfective と Habitual を形式によって区別することはできない。

3.2. 用語の代替案の提示

ここでは、TA 体系の理解において誤解を招きかねない Doke (1922, 1938) 独特の用語法について説明し、Comrie (1977) や Dahl (1985), Nurse (2008) の定義と照らし合わせながら代替案の提示を行う。

3.2.1. Doke (1922, 1938) の Progressive

まず、Doke が Progressive と呼んでいる TA 接辞 *chi-* の用法についてである。表の形式では⑩と⑪、⑭と⑮、⑳と㉑、㉓と㉔が該当する。Comrie (1977) の定義によれば、Progressive は本来、発話時（あるいは参照点）において進行している動作を表すものである (Comrie 1977: 32-40)。しかし Doke (1922, 1938) が Progressive としている TA 接辞の *chi-* が表すのは、「まだ～している」という意味である。つまり *chi-* によって表されるのは、過去のある時点で起こり発話時まで切れ目なく保持されている状況である (Nurse 2008: 145)。これは Progressive とは区別して Persistent (持続相) (Nurse 2008: 145-148) と呼ぶのがバントゥ諸語研究においては一般的である。

- (10) *ichiβusa chanji chi-∅-chi-imb-a na βukuumo*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-PES-sing-BF and now
 「私の友達はいまだに歌っている」

- (11) *ichiβusa chanji chi-∅-chi-laal-ile na βukuumo*
 7.friend 7SM-my 7SM-PRS-PES-sleep-ANTF and now
 「私の友達はいまだに寝ている」

3.2.2. Doke (1922) の Perfect

表 2 の形式③と複合の形式⑤は、Doke (1922) では Perfect とされている。Perfect (完了相) とは、Comrie (1977) や Dahl (1985) などの定義では、過去に起こった出来事による結果状態が発話時まで続いている、あるいは過去に起こった出来事が発話時と関連性を持つことを表す用語である (Comrie 1977: 52, Dahl 1985: 133-138, Bybee et. al 1994: 54, Nurse 2007: 165, Nurse 2008: 95, 154-155)。しかし、以下のようにカギが発話時の前日以前になくなったことを表した形式③の例 (12a), カギが発話当日になくなったことを表した形式⑤の例 (12b) は、いずれも「しかし今は（そのカギは）見つかっている」という文を後続させることができる。

- (12) a. *imfungulo i-a-li-luβ-ile ukufuma uyu umulungu pano*
 9.key 9SM-PST-ANT-get_lost-ANTF since 3.this 3.week but
i-a-βon-ik-a βukuumo
 9SM-PST-see-NEUT-BF 14.now
 「カギは先週からなかったが、今はもう見つかっている」
- b. *imfungulo i-a-li i-a-luβ-a pano i-a-βon-ik-a βukuumo*
 9.key 9SM-PST-be 9SM-ANT-get_lost-BF but 9SM-PST-see-NEUT-BF 14.now
 「カギはなくなったが、今はもう見つかっている」

つまり、カギをなくしたという出来事によって起こった「カギがない」状態は、発話時にはす

でに解決しているということであり、過去の出来事に発話時との関連性は存在しない。よって形式③と⑤のいずれも現代の用語法でいう Perfect (Comrie 1977 など) の定義からは外れている。

ランバ語で過去に起こった出来事による結果状態が発話時まで続いている、あるいは過去に起こった出来事が発話時と関連性を持つことを表す形式には、まず TA 接辞 *a-* と語尾 *-a* によって表される形式④がある。この形式は、Doke (1922) では Immediate Past Simple, Doke (1938) では Immediate Past Indefinite と呼ばれている。Doke (1922, 1938) で Present Perfect とされている TA 接辞 *li-* と語尾 *-ile* によって表される形式⑥も同じ状況を表す。(13) のように、カギがなくなったことを形式④あるいは形式⑥で表すと、「でも (カギは) 今はもう見つかっている」という文を後続させられなくなる。つまり形式④と形式⑥によって表されるカギがなくなった状態は、発話時まで続いているということになる¹¹。

- (13) a. **imfungulo i-a-luβ-a* *pano i-a-βon-ik-a* *βukuumo*
 9.key 9SM-PST-get_lost-BF but 9SM-PST¹²-see-NEUT-BF 14.now
 (int. カギはなくなったが, 今はもう見つかっている)
- b. **imfungulo i-ø-li-luβ-ile* *ukufuma uyu umulungu pano*
 9.key 9SM-PRS-ANT-get_lost-ANTF since 3.this 3.week but
i-a-βon-ik-a *βukuumo*
 9SM-PST-see-NEUT-BF 14.now
 (int. カギは先週からなかったが, 今はもう見つかっている)

3.2.3. Doke (1938) の Perfect

Doke (1938) が用いている Perfect も、Comrie (1977) による定義には沿っていないうえに、上述の Doke (1922) で使われていた Perfect とも意味合いが異なる。ランバ語では、コピュラ動詞 *li* が、不定詞を作る接頭辞 *uku-* が付いた動詞に後続される形式 (以下 *luku-* 形式¹³) と、コピュラ動詞はとらずに TA 接辞として *chi-* をとる Persistent ((10), (11)) は、両形式とも語尾に *-a* をとるか *-ile* をとるかが動詞によって異なる。Doke (1938) では語尾に *-a* をとる形式を Continuous とし、それと対になる語尾に *-ile* をとる形式に Perfect を用いている。以下の (14), (15) は明日以降の未来を表す TA 接辞 *ka-* が *luku-* をとった例である。(14) のように *pend* 「読む」の場合は語尾に *-a* を、(15) のように *laal* 「寝る」の場合は語尾に *-ile* をとる。Doke (1938) が Perfect としているのは (15) の語尾に *-ile* をとる方の形式である。Persistent の *chi-* が語尾に *-ile* をとった (16) も、Doke (1938) は Progressive (本稿で Persistent が適当だとしたもの) の Perfect としている¹⁴。

- (14) *ichibusa chanji chi-ka-li* *uku-pend-a ili* *ibuuku mailo* *ulúcheelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-read-BF 5.this 5.book tomorrow morning
 「私の友達は明日の朝もこの本を読んでいるだろう」

¹¹ *a-* 形式と *li-* 形式の違いについては牧野 (2019) でも触れているが、詳細な議論は紙面を改めて行う。

¹² 本稿では *a-* 形式の TA 接辞 *a-* は (5) や (6) などの例にある過去を表す接辞 *a-* と同じものとしているが、TA 接辞 *a-* 単独で用いられる場合には、発話時 (参照点) よりも前に出来事が起こっているということが示されるのみである。

¹³ 本稿ではコピュラ動詞 *li* と不定詞を作る接頭辞 *uku-* が融合したものと分析しているが、Doke (1922, 1938) は単に TA 接辞 *luku-* と分析している。

¹⁴ Doke (1938) の Perfect は、Doke (1922) では Stative と呼ばれている (Doke 1922: 67–70)。

- (15) *ichiβusa chanji chi-ka-li uku-laal-ile mailo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-sleep-ANTF tomorrow afternoon
 「私の友達は明日の午後もまだ寝ているだろう」
- (16) *ichiβusa chanji chi-chi-laal-ile na βukuumo*
 7.friend 7SM-my 7SM-PES-fall_asleep-ANTF and now
 「私の友達はいまだに寝ている」 (= (11))

(15), (16) をみると、Perfect という呼び方はここでも適切とは言えない。また、Doke (1922) の使い方をみてもわかるように、Perfect は Perfective と混同されがちである。このようなほかの観点との誤解を避けるため、Nurse は Perfect の代わりに Anterior という用語を使うことを推奨している (Nurse 2007: 165, Nurse 2008: 154)。よって本稿でも Anterior という呼び方を採用する。なお、Bybee et al. (1994) は発話時より前に起こった結果状態が発話時まで続いているものを Resultative とし、発話時より前になされた動作が発話時と関連性を持っているものを Anterior としているが (Bybee et al. 1994: 61, 63, cf. Dahl 1985: 134–135)、本稿では両者を区別しない。これは、形式④と形式⑩ともに結果状態の継続も発話時と関連性のある過去に起こった動作のどちらも表すことができるからである。

Doke (1922) では Continuous, Doke (1938) では Continuous あるいは Perfect とされていた *luku-* 形式は、参照点において継続している動作や状態を表すため、語尾が *-a* か *-ile* かにかかわらず Imperfective と呼ぶのが適切である¹⁵。TA 接辞に *chi-* をとり「まだ～している」という意味を表す Persistent の形式も、動詞によって語尾に *-a* をとるか *-ile* をとるかが決まる。そのため、Doke (1938) はここでも語尾に *-ile* をとる後者を Perfect と呼んで、語尾に *-a* をとる Continuous と対比させているが、この使い方も同様に適切ではないと思われる。

3.3. 現存していない形式

Doke (1922, 1938) によると、*luku-* 形式は表2, 表3にも示しているようにテンスにかかわらず語尾に *-a* と *-ile* のどちらもとれることになっている。しかし筆者のデータでは、(17) のように過去テンスの *luku-* 形式が語尾に *-ile* をとる形式②は非文である。過去テンスにおいて *luku-* 形式が語尾にとるのは (18a) のように *-a* のみである。*pend* 「読む」のような動作動詞では (18a) のように過去のある時点において「読む」という動作が進行中であったことが表される。*laal* 「寝る」では以下の (18b) ように状態ではなく過去の習慣が表される。

- (17) **ichiβusa chanji chi-a-li uku-laal-ile ulu n-a-i-ile*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-fall_asleep-ANTF when 1sgSM-PST-go-ANTF
mu-ku-chi-βon-a
 LOC-INF-7OM-see-BF
 (int. 私の友達は私が(昨日以前に) 会いに行ったとき寝ていた)

¹⁵ *luku-* 形式の詳しい用法については牧野 (2019) を参照されたい。なお、この Imperfective は、Comrie (1977) の言う Perfective と対立する概念としての Imperfective (Comrie 1977: 25) ではなく、参照点あるいはその前後で継続していて、始まりや終わりなどの境界のない出来事を表す Imperfective (Nurse 2008: 136) である。

- (18) a. *ichiβusa chanji chi-a-li uku-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-read-BF 5.this 5.book yesterday
 「私の友達は昨日この本を読んでいた」
- b. *ichiβusa chanji chi-a-li uku-laal-a kani chi-a-βon-a ápensu*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-fall_asleep-BF if 7SM-PST-see-BF 2.guests
 「私の友達は客が来るといつもベッドにもぐりこんだ」

現在テンスの *luku-* 形式においても、語尾に *-ile* をとる形式⑬が現れたのは、動詞に *lwal* 「病気である」をとった (19) の 1 例のみで、ほかの動詞では (20) のように非文として判断される。つまり形式⑬は非常に稀であり、現在ではほぼ非文であると言ってよい。*luku-* 形式は現在テンスにおいても語尾にとれるのは *-a* のみであり、動詞 *pend* 「読む」では (21a) のように発話時において「読む」という行為がなされている最中であることが表される。*laal* 「寝る」が *luku-* の語尾に *-a* をとる形式⑭で表れた場合は、(21b) のように近い未来に起こる出来事が表される。

- (19) *n-ø-li uku-lwall-ile*
 1sgSM-PRS-be INF-be_sick-ANTF
 「私は病気である」
- (20) **ichiβusa chanji chi-ø-li uku-laal-ile*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-be INF-sleep-ANTF

- (21) a. *ichiβusa chanji chi-ø-li uku-pend-a ili ibuuku*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-be INF-read-BF 5.this 5.book
 「私の友達はこの本を読んでいる」
- b. *ichiβusa chanji chi-ø-li uku-laal-a*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-be INF-sleep-BF
 「私の友達は (もうすぐ) 寝る」

形式②, ⑬のほか、未来テンスで不定詞の接頭辞 *uku-* に Persistentive の *chi-* をとる形式である⑳, ㉑, ㉒も観察されなくなっている。

3.4. Doke (1922, 1938) にはない新たな形式

(5) の当日過去の形式⑤と (14)–(16), (18)–(21) の *luku-* 形式は、どちらもコピュラ動詞 *li* との複合形式である。筆者の調査データでは、これらの複合形式と同じ意味を表す形式が新たに見つかった。ただし、これらの新形式のいくつかについては、Bickmore (1995) や湯川 (1995) でもすでに報告されている。以下 a と b で分けている例文については、a には新たに報告された、あるいは筆者の調査で見つかった形式、b には Doke (1922, 1938) でもすでに報告のある、もともと存在していた形式を挙げている。

3.4.1. 当日過去を表す新たな形式

まずひとつめは、当日過去を表す以下の (22a) である。(22a) は TA 接辞に *achi-*、語尾に *-a* の組み合わせで表されている。これは Bickmore (1995) と湯川 (1995) で新たに報告された形式である。

発話当日に起こった出来事を表しており、(22b)に示すように複合形式⑤と用法が同じである。

- (22) a. *ichíβusa chanji chi-achi-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.PST-read-BF 5.this 5.book today
 b. *ichíβusa chanji chi-a-li chi-a-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PST-read-BF 5.this 5.book today
 「私の友達は今日この本を読んだ」(=(6a))

3.4.2. Imperfective を表す新たな形式

以下、(23a), (24a), (25a)のTA接辞 *lee-* は、Bickmore (1995) で新たに報告された接辞であり¹⁶、これによって表されるのは *luku-* 形式と同じく参照点において継続していた出来事である。したがって接辞 *lee-* が表すのは Imperfective である。以下の (23a) は明日以降の未来を表すTA接辞 *ka-* が接辞 *lee-* をとった例である。(23b)の *luku-* 形式②③と同じように、明日のある時点において「読む」という行為が進行中であることを表す。

- (23) a. *ichíβusa chanji chi-ka-lee-pend-a ili ibuuku mailo ulúcheelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-IMPV-read-BF 5.this 5.book tomorrow morning
 b. *ichíβusa chanji chi-ka-li uku-pend-a ili ibuuku mailo ulúcheelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-read-BF 5.this 5.book tomorrow morning
 「私の友達は明日の朝この本を読んでいるだろう」

TA接辞が *aku-* になり参照点が発話当日になった場合も同様に、(24a)の接辞 *lee-* が使われた例と(24b)の *luku-* 形式(形式⑧)が使われた例は同じ意味を表す。(24a)も(24b)も発話当日のある時点において「読む」という動作が継続されることを表す。

- (24) a. *ichíβusa chanji chi-aku-lee-pend-a ili ibuuku akásuβa leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-IMPV-read-BF 5.this 5.book afternoon today
 b. *ichíβusa chanji chi-aku-li uku-pend-a ili ibuuku akásuβa leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-be INF-read-BF 5.this 5.book afternoon today
 「私の友達は今日の午後この本を読んでいるだろう」

以下の(25)は過去テンスにおける Imperfective の例である。(25a)が新形式のTA接辞 *lee-* をとった例で、(25b)の *luku-* 形式①と同じく、過去のある時点において「読む」という行為が進行中であったことを表す。

- (25) a. *ichíβusa chanji chi-a-lee-pend-a ili ibuuku leelo/mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-IMPV-read-BF 5.this 5.book today/yesterday
 b. *ichíβusa chanji chi-a-li uku-pend-a ili ibuuku leelo/mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-read-BF 5.this 5.book today/yesterday
 「私の友達は今日/昨日本を読んでいた」

¹⁶ 牧野 (2019) では接辞 *lee-* が湯川 (1995) でも報告されているとしたが (牧野 2019: 22)、これは筆者の誤りである。

(25) が表す過去の Imperfective は、参照点が発話当日と昨日以前のどちらにあっても構わないが、TA 接辞に *achi-* をとると発話当日の Imperfective の出来事のみを表すことになる。ただしここで Imperfective を表す接辞として現れるのは、以下の (26) のように *lee-* ではなく *laa-* である。TA 接辞として *laa-* が現れる形式は、Bickmore (1995) でも湯川 (1995) でも報告されていない。

- (26) a. **ichíβusa chanji chi-achi-lee-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.PST-IMPV-read-BF 5.this 5.book today
 (int. 私の友達は今日この本を読んでいた)
- b. *ichíβusa chanji chi-achi-laa-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.PST-IMPV2-read-BF 5.this 5.book today
 「私の友達は今日この本を読んでいた」

luku- 形式は、TA 接辞が未来を表す *aku-* や *ka-* である場合、語尾に *-ile* をとることができる (cf. 表 2, 表 3 の ㉑と ㉒)。これは *luku-* 形式の代わりに接辞 *lee-* が用いられる場合も同様である。これらの形式も、どの先行研究においてもまだ報告されていない。

- (27) a. *ichíβusa chanji chi-ka-lee-laal-ile mailo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-IMPV-sleep-ANTF tomorrow afternoon
- b. *ichíβusa chanji chi-ka-li uku-laal-ile mailo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-sleep-ANTF yesterday afternoon
 「私の友達は明日の午後の時点で寝ているだろう」 (= (15))
- (28) a. *ichíβusa chanji chi-aku-lee-laal-ile leelo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-IMPV-sleep-ANTF today afternoon
- b. *ichíβusa chanji chi-aku-li uku-laal-ile leelo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-be INF-sleep-ANTF today afternoon
 「私の友達は今日の午後もまだ寝ているだろう」

3.4.1 で挙げた TA 接辞に *achi-* が現れる形式と接辞 *lee-* が現れる形式は、どちらもベンバ語では早い段階から観察されている形式である (Sharman 1955)。ベンバ語はザンビア北西部の主要言語である。ランバ語が話されている中部においても有力言語であり、ランバ語ではなくベンバ語を優先的に話している話者も多い。したがって、ベンバ語が語彙や文法においてランバ語に大きな影響を与えていることは十分に考えられる。*achi-* や *lee-* が現れる形式はベンバ語から借用した形式と考えるとよいだろう。つまり、Doke (1922, 1938) の時点では複合形式で表されていたテンスあるいはアスペクトが、*achi-* や *lee-* のような TA 接辞のみでも表されるようになったということである。また、当日過去の接辞 *achi-* で Imperfective の出来事を表す場合、(26) のように TA 接辞には *lee-* ではなく *laa-* が用いられるが、これもベンバ語では早い段階で観察されている形式である (Sharman 1955)。

3.4.3. 過去テンスにおける Persistentive

参照点が過去にある場合の Persistentive は、以下のようにコピュラ動詞の過去形に形式 ㉑あるいは ㉒が後続することによって表される。(29) は形式 ㉑が後続した形式の例である。この複合形式も先行研究では報告されていない。

- (29) *ichiβusa chanji chi-a-li chi-chi-laal-ile ulu n-a-i-ile*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PES-fall_asleep-ANTF when 1sgSM-PST-go-ANTF
mu-ku-chi-βon-a mailo akásuβa
 LOC-INF-7OM-see-BF yesterday afternoon
 「私の友達は私が昨日の午後訪ねた時まで寝ていた」

4. 新たなテンス・アスペクト体系の提案

ここまでの用語の使い方の訂正や形式の存在の有無の確認を反映させて、TA 体系をまとめ直したのが表 4 である（依存テンスは除く）。

まず Doke (1922, 1938) で Perfect とされていた形式のうち、形式⑮、⑲、⑳は、Persistentive あるいは Imperfective において完了語尾 *-ile* をとる形式である。これらの形式に用いられている Perfect は、それぞれ同じアスペクトにおいて基本語尾 *-a* をとる形式（⑭、⑱、㉓、㉔）と対比させるための呼び方だと考えられるが、この使い方は適切とは言えない。よって本稿では形式⑮、⑲、㉔、㉕を Perfect と呼ぶことはしない。㉒と㉓は本来の Perfect (Comrie 1977 など) ではなく、Perfective である。Doke (1922) は Perfective と Perfect を混同して用いていた可能性がある。Nurse (2008) が指摘するように、両者が混同されるケースは多い (Nurse 2008: 95, 154)。本稿では無用な混乱を避けるため、Perfect の代わりに Anterior (Nurse 2007, 2008) を用いることにした。Anterior の要件を満たすのは形式④と⑯である。

luku- が語尾に *-ile* をとる形式は、未来テンスと TA 接辞に *nga-* をとる形式以外では現存していないため、形式㉒と㉓には×印を付けている。*luku-* 形式が Persistentive の *chi-* をとる形式（㉔と㉕、㉖と㉗）も筆者の調査では非文となった。番号が太字になっている形式㉘–㉙は、ベンバ語から新たに借用したと考えられる形式である。㉘は発話当日に起こった過去の出来事を表す。形式㉔、㉕–㉖にある TA 接辞 *lee-* は、*luku-* と同じく Imperfective を表す。ただし当日過去 *achi-* で Imperfective を表す場合は、形式㉕にあるように *lee-* ではなく *laa-* をとる。㉗、㉘は先行研究では報告されていなかった複合形式で、過去テンスにおける Persistentive を表す。

TA 接辞がゼロで語尾に *-ile* をとる以下の形式 (*ø*-形式) は、筆者が新たに動詞のパラダイムに提案する TA 形式である¹⁷。以下の (30)、(31) のように状態を表す (牧野 2019: 29–30)。

- (30) *ilaaya li-ø-um-ile*
 5.dress 5SM-PRS-get_dry-ANTF
 「(その) 服は乾いている」
- (31) *impata i-ø-um-ile*
 9.desert 9SM-PRS-get_dry-ANTF
 「砂漠は乾いている」

(30) は一時的な状態であるが、(31) の状態は本質的なものである。ある出来事が時間の流れによる影響を受けるかどうかという観点は、叙述類型論によるものである (cf. 益岡 (2008))。ここ

¹⁷ *ø*-形式は、牧野 (2019) の表では *li-* 形式との機能の類似性や補完関係を指摘できることなどから Anterior の欄に入れているが (牧野 2019: 31)、まだ検討の余地がある。

表4 筆者が新たに提案する TA パラダイム

	Perfective	Imperfective <i>-li+ uku-/ lee-</i>	Persistentive <i>-chi-</i>	Anterior
Pre-Hodiernal Past <i>-a-</i>	③SM-a-li-VR-ile	①SM-a-li uku-VR-a ②×	③⑥SM-a-li SM-chi-VR-a	④SM-a-VR-a ⑥SM-ø-li-VR-ile
Hodiernal Past <i>-a/ achi-</i>	⑤SM-a-li SM-a-VR-a ②⑧SM-achi-VR-a	②⑨SM-a-lee-VR-a ③⑩SM-achi-laa-VR-a	③⑦SM-a-li SM-chi-VR-ile	
Present <i>-ø-</i>	②⑦SM-la-VR-a	①②SM-ø-li uku-VR-a ①③× ③①SM-ø-lee-VR-a	①④SM-ø-chi-VR-a ①⑤SM-ø-chi-VR-ile	
Hodiernal Future <i>-aku-</i>	①⑦SM-aku-VR-a	①⑧SM-aku-li uku-VR-a ③②SM-aku-lee-VR-a ①⑨SM-aku-li uku-VR-ile ③③SM-aku-lee-VR-ile	②⑩× ②①×	
Post-Hodiernal Future <i>-ka-</i>	②②SM-ka-VR-a	②③SM-ka-li uku-VR-a ③④SM-ka-lee-VR-a ②④SM-ka-li uku-VR-ile ③⑤SM-ka-lee-VR-ile	②⑤× ②⑥×	

では割愛したが、Anteriorの形式⑥にも本質的な状態を表す用法がある。今後こういった観点からの議論も必要である。

5. おわりに

以上、Doke (1922, 1938) によるランバ語の参照文法について、TA体系の分析の問題点を中心に述べた。Doke (1922, 1938) によるランバ語の文法書は、用語の使い方が独特で、TA体系の理解を妨げかねない状態だった。そこで本稿ではComrie (1977) やDahl (1985), Bybee et al. (1994), Nurse (2007, 2008) による定義にもとづいて用語の使い方を再検討した。また、すでに使われなくなった形式や、地域共通語であるベンバ語から借用したと思われる新たな形式が存在していることがわかり、これらの事実も反映させながら新たなTA体系の提案を行った。本稿ではDoke (1922, 1938) による用語の使い方、形式の存在の有無を中心に論を展開したが、各TA形式の詳細については牧野 (2019) を参照されたい。なお、筆者が新たに動詞のパラダイムに入れることを提案した \emptyset -形式およびこれについての叙述類型論的な観点からの議論は、今後の課題である。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016–2017年度)の成果の一部である。

略語一覧

ANT	Anterior	OM	Object Marker
ANTF	Anterior Final	PES	Persistent
BF	Basic Final	pl	plural
HOD.FUT	Hodiernal Future	PFV	Perfective
HOD.PST	Hodiernal Past	PRS	Present
IMPFV	Imperfective	PST	Past
IMPFV2	Imperfective2	REM.FUT	Remote (Post-Hodiernal) Future
INF	Infinitive Prefix	sg	singular
LOC	Locative Prefix	SM	Subject Marker
NAR	Narrative	VP	Verb Root
NEG	Negative		
NEUT	Neuter		

参考文献

- Bickmore, Lee, S. 1995. "Tone and Stress in Lamba." *Phonology* 12: 307–341.
- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Barnard. 1977. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. New York: Basil Blackwell.
- Doke, Clement, M. 1922. *The Grammar of the Lamba Language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
- . 1927a. *Text-Book of Zulu Grammar*. London: Longmans, Green & Co. Ltd.
- . 1927b. "A Study in Lamba Phonetics." *Bantu Studies* 3(1): 5–47.
- . 1930. "Additional Lamba Aphorisms." *Bantu Studies* 4(2): 111–135.
- . 1931. *The Lambas in Northern Rhodesia: A Study of Their Customs and Beliefs*. Westport, Connecticut: Negro University Press.
- . 1934. "Lamba Literature." *Africa* 7(3): 351–370.
- . 1938. *Textbook of Lamba Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- . 1939. "Lamba Folk Tales Annotated." *Bantu Studies* 13(2): 85–111.
- . 1954. *The Southern Bantu Languages*. London; New York: Oxford University Press.
- . 1959. *Amasiwi AwaLesa* (The Words of God). Lusaka: Bible Society in Zambia.
- . 1963. *English-Lamba Vocabulary*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- and S. M. Mofokeng. 1957. *Textbook of Southern Sotho Grammar*. London: Longmans, Green & Co.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fenning, eds. 2019. *Ethnologue: Languages of the World. Twenty-Second Edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com> (2019年5月8日閲覧)
- Madan, Arthur, C. 1908. *Lala-Lamba Handbook: A Short Introduction to the South-Western Division of the Wisa-Lala Dialect of Northern Rhodesia, with Stories and Vocabulary*. Oxford: the Clarendon Press. (Reprinted by Nabu Press in 2013.)

- . 1913. *Lala-Lamba-Wisa & English: English & Lala-Lamba-Wisa Dictionary*. Oxford: the Clarendon Press. (Reprinted by Nabu Press in 2011.)
- Nurse, Derek. 2007. “The Emergence of Tense in Early Bantu.” *Selected Proceedings of the 37th Annual Conference on African Linguistics* (Doris L. Payne and Jaime Peña, eds.), 164–179, Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- . 2008. *Tense and Aspect in Bantu*. Oxford: Oxford University Press.
- Sharman, John, C. 1955. “The Tabulation of Tenses in a Bantu Language (Bemba: Northern Rhodesia).” *Africa* 26: 29–46.
- 牧野友香 2019 「ランバ語のテンス・アスペクト体系の再検討」『スワヒリ & アフリカ研究』30: 14–32.
- 益岡隆志 2008 「叙述類型論に向けて」益岡隆志(編)『叙述類型論』, 3–18, 東京: くろしお出版.
- 湯川恭敏 1995 「ランバ語」『バントゥ諸語動詞アクセントの研究』, 140–157, 東京: ひつじ書房.
- 米田信子 2012 「アフリカの識字を考える」『リテラシー再考 (ことばと社会)』14: 43–66.